

[書評] 生成する偶然性

有限性の超克としての偶然性の役割

佐藤麻貴

1 はじめに

本稿は『渦動する象徴——田辺哲学のダイナミズム』に収録された宮野真生子氏の論考「偶然性の役割とは何か——「社会存在の論理」と『偶然性の問題』」に焦点を当てる。まず、優れた諸論考の中から何故、宮野論考を選んだのか釈明する。次に田辺と九鬼の往復書簡から見る師弟の偶然性の考察における相違について論じた宮野論考を概観しつつ、改めて田辺と九鬼が見た偶然性に内在する問題の射程と所在をつまびらかにする。その上で拙論として偶然性の問題を引き受け、偶然性について改めて問い直す現代的な意義につき、いくつかの問題提起をしながら考察を深めてみたい。

2 生という有限性の超克のために——死者との邂逅から生まれる偶発

宮野氏は『渦動する象徴』の発刊を目にすることなく、この世を去られている。収録論考は氏が生前に『福岡大学人文論叢』に寄稿されたものが再録されている。九鬼は運命とは、必然と偶然が邂逅するところで展開するものと定義しているが「あることもあらざることもできたもの」としての偶然の中で、私は宮野論考に出会った¹。この偶然に邂逅した以上、その偶然をいかように引き受けるのか、というのは私個人の判断に関わっている。この論考を鬼籍に入られた方の論考として、書評をしない選択もあっただろう。なぜなら書評とは現在性を共有し応答可能性があるから意味を有するものと思うが、当該論考については書評をしても応答を得る可能性が無いからである。しかしながら、拙論を書くに至った背景にも、偶然に起

¹ 九鬼周造『偶然性の問題』岩波書店、2012年、245-256。

因する弱い因果という偶発性が働いている。

私は分からないなりに田辺の「メメント・モリ」を愛読しており、その中で田辺が取り上げた『碧巖録（集）』第五十五則、道吾一家弔意の公案が念頭にあった²。この公案は、檀家の不幸を弔慰した時に生死の問題に熱中する若手の僧漸減が棺を打って「生か死か」と問うたことに対し、師僧道吾がただ「生ともいわじ死ともいわじ」と答える公案である。道吾が他界した時に、漸減が兄弟子の石霜にこの話をすると、石霜も「不道不動（いわじいわじ）」というだけだった。ここで初めて漸減は、生か死かという二律背反に立ち矛盾律に固執していた自分に対し、生か死かではなく、両者を不可分離の連関において理解しなくてはならないのだという道吾の教えの意味を悟り、道吾が死してなお弟子の漸減に教え、漸減の内に生きることを自覚したという逸話である³。

田辺が『碧巖録』の公案を引いて強調したのは、死してなおも師弟を教え続けられる「死にして生という死復活の実証」の例として恰好の公案であったからであろう⁴。田辺は、自己が死んだとしても愛に依って結ばれていれば自己の生死を超えた「実存協同」において復活し、自己否定（死）を媒介として永遠の今に参じ不死を成就すると主張する⁵。つづけて「生の哲学」に対し「死の哲学」を対照として提示することにより、両者の間にある運動軸の差異を強調する。「生の哲学」は理想主義的であり「直線的表現的」であるがゆえに観念論的であることに対し、「死の哲学」は「渦動的象徴的」であり実在論的であると論ずる⁶。『渦動する象徴』とは、田辺の「死の哲学」であり実在論を射程に据えた書ともいえる。だとすれば、実在論的に現にある私という個が『渦動する象徴』に収録された一つの論考に対して書評を書くとき、宮野氏の論考を通して彼女の死復活に私が立ち会うこと、これを実践するしかないだろうと思うに至った。

² 田辺元著・藤田正勝編『死の哲学』岩波書店、2010年、13-29。

³ 田辺は『碧巖録』五十五則の前半部についてのみ考察しており、漸減がその後、道吾の靈骨を探し回るといふ逸話の箇所については、特に解説を加えていない。また、田辺の『碧巖録』五十五則解釈の独創性については、次を参照のこと。末木文美士『「碧巖録」を読む』岩波書店、2018年、255-258。

⁴ Ibid. [2010]. 19.

⁵ Ibid. [2010]. 22.

⁶ Ibid. [2010]. 26-27.

本論考は、その様々な偶然が邂逅した結果の偶発的発露として、私が現在性において、宮野氏がまとめた九鬼と田辺の偶然性の議論を引き受け、宮野論考と出会い、紐解き、書評を書く機会を頂戴したという、摩訶不思議な偶然性に導かれている。本稿は一連の偶然の動的な連なりが無ければ発露しなかった偶発を契機にしてるとも云えよう。宮野氏のテキストを媒介に田辺と九鬼を復活させ、更に宮野氏のテキストと私という解釈者を媒介にする入れ子構造的媒介により本稿は成立する。また、宮野、田辺、九鬼の死復活を渦動的象徴的に私が偶然的に経験し、その経験の最中に思考した事柄を論考にすることを通して、生という有限性を非力ながら超克してみようという試みでもある。

3 宮野論考における田辺と九鬼の偶然性の考察について

博士論文で偶然性について考察した九鬼周造と、彼の指導教官としての田辺元が受け止めた偶然性の問題とは何だったろうか。『渦動する象徴』に収録されている宮野論考「偶然性の役割とは何か——「社会存在の論理」と『偶然性の問題』」は、田辺と九鬼の偶然性に関する見解の差異を往復書簡の中に見出し、師弟の議論の過程をスリングに解き明かしていく優れた論考だ。一連の議論の前提には九鬼による偶然の定義——「偶然性とは必然性の否定」——がある⁷。九鬼は、偶然性を論理的、経験的、形而上的次元に分け、世界を因果性によって規定する時、それは経験的には必然と云われ、形而上的には偶然と云われるとしている。偶然を経験の見地から見た因果的偶然と、歴史の起始としての原偶然という世界の有り様の必然という形而上的偶然とに分けることにより、九鬼の議論は成立する。つまり、形而上的偶然とは、原偶然が実体化したものであると同時に、世界が「他でもあり得た」という捉え直しによって成立するとしている。そして、偶然性を生きるためには、未来によって倒逆的に偶然性の驚異を基礎づけること、そして偶然の邂逅に際し、その邂逅の瞬間に驚異をもってあたることとしている。こうした九鬼の論考に対し、田辺が呈したのは、九鬼の持ち出す未来に基礎付けせざるをえない偶然性に対し、

⁷ Ibid. [2012]. 13.

その偶然性に「目的らしさ」を介在させることにより、偶然が必然化されるのではないか、という問いであった。当該論考は、こうした九鬼と田辺における偶然性の認識の相違から始まる。

田辺の九鬼の批判点は、言い換えると、田辺が研究を重ねたヘーゲル歴史哲学に依拠し、時系列的因果論に偏重しているともいえなくはない。つまり、田辺の視点からすると、現在性において偶然的に発生した出来事も、歴史的事象として後付的に見ると必然であったと措定できる。九鬼の観点で言えば、田辺はヘーゲルの視点に依拠しながら、偶然を生きる上では目的論が欠かせないという視点を九鬼に提供したともいえる。田辺は更に論を進め、偶然を生きる合目的性の必要性を説き、その合目的性は偶然を受け取り、そこから意味を引き出すのではなく、行為する中で、偶然のもつ否定性を対自的に自覚し、その先で目指される無としての「超越的全体」でなくてはならないと指摘する。田辺にすると、九鬼は偶然性を形而上偶然と経験的偶然に分離することにより、道徳的实践における偶然の位置づけを見落としているように見受けられたのだ。田辺は、九鬼偶然論の問題点を解決するためには、「絶対者に於ける矛盾的意味」を明らかにしなくてはならないという解決法を提示する。すなわち、個別に与えられた矛盾的意味（一区分肢）と、存在の根拠となる可能性全体（被区分肢）を明らかにすることが要請されると指摘する。

田辺から偶然的存在としての個体と（必然的存在の）絶対者との関係性を明らかにするよう要請された九鬼は田辺への応答として『偶然性の問題』(1935)において、従来、形而上的偶然と名付けていたものを離接的偶然と呼び変え、新たに二つの論点を加える。九鬼は田辺の問いを——必然である絶対者が、どのように偶然の個体を生じさせるのか。その時の絶対と個体の関係性は何か。——という二つの問いであると受け止めたのだらうと宮野は論じている。したがって宮野によると、九鬼が田辺への応答として新たに九鬼の偶然論に加えた論点は次の二つになる。一つ目の問いへの応答としては、動的に捉えられる絶対者のあり方（円環的運動）という視点を加えることにより、個体の偶然性は原始偶然の動性に基づくとした。また、二つ目の問いに対しては、偶然性を「あることもあらざることも出来るもの」と捉え、可能性と不可能性のあいだにおける、不可能性（あらざることも出来る）への極限

的近接と反発という力の発現として、そのような偶然を現在という瞬間にしか成立しない生産点（生産点としての現在）と捉え直した。九鬼の偶然性の捉え直しに対し宮野は、田辺が「人間学の立場」（1931）で強調した「現在の動性」とその「力的主体」のあり方を想起させると指摘している⁸。九鬼の議論は現在性においてのみ成立する偶然に驚きをもって向き合うと同時に、その偶然の動性を他者との関係性に関きつつ、引き受けきれない偶然性でさえ引き受けるという、偶然性の肯定とその称揚へと繋がっていく。九鬼は無数の「偶然が実存へ偶然する」とし、「必然—偶然」という相互否定的契機に「静的—動的」構造を差しはさむことによって、無限の可能性が複数の不可能性と一つ可能へと偶然化した結果としての「私」とこの現実世界の存在そのものを「運命」という⁹。九鬼にとって「私」「汝」という個的存在は、偶然が偶然してしまった結果であり、それ故にそれぞれがかけがえなく美しい¹⁰。

宮野論考では、田辺の論考「人間学の立場」と「社会存在の論理」（1934-35）に触れつつ「種の論理」を俯瞰しながら、田辺にとっての偶然性の論点を更に概観していく。宮野によると田辺は「人間学の立場」において身体に着目し、身体が「現在の動性」の媒介となると同時に共同社会につながる基底として捉えていた¹¹。田辺は社会を生きる個体のあり方を模索しつつ、「社会存在の論理」では普遍と特殊の二項対立構造からは社会を生きる個体を捉えることができないゆえに、個体と全体を媒介するものとして「種」の概念を提示する。「種」は生命の一と存在の多とを媒介するが、個体は「種の連続的な限定の極限」ではなく、種と独立に成立し、種に対抗する。ここで田辺において、偶然性の問題が改めて問われていると宮野論考は指摘している。すなわち、個は偶然性という「あらざるを得るものがある」という有と無との相克性を内在するからこそ本質的に「自由」であり、またその有無を自らのものとして引き受けるところに個の「自由」が成立する。個は自由である

⁸ 杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴—田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房、2021年、240。

⁹ Ibid. [2012]. 245-256.

¹⁰ Ibid. [2012]. 441.

¹¹ Ibid. [2021]. 241.

からこそ母胎である種から独立し、種に対抗することが可能であると田辺は考えるのだ。時間軸的に見ると、過去に限定されている種に対し、個は種から独立し対立することにより、未来に向かおうとする自由を手に行っている動的なものでもある。換言すると「種」は、個が自由であり未来に開いていくための、媒介的な概念であるとも言えるだろう。

宮野論考によると、田辺は九鬼の偶然性の議論を手立てに、社会の捉え方に対する考察を深めたとされている。九鬼は「我と汝」の自他関係を起点とする社会存在として個を捉えているに過ぎず、個は互いに自由で等しい存在として、また、社会を「調和的共存」として捉えていることに問題があるとして、田辺は九鬼の議論を「交互相関の論理」とであると批判する。宮野氏は、田辺が論敵として念頭に置いていたのは九鬼よりも、西田幾多郎であったろうと推察しているが、田辺と九鬼の偶然の議論を分けるポイントとして、偶然の否定的契機と、その否定性との対峙の仕方であろうと論じている¹²。換言すると、九鬼は人間が関与できないものとして偶然性のもつ否定性（あることもあらざることもできるもの）を論じ、偶然を現実そのものの動性と捉えた。他方、田辺は「社会存在の論理」において、九鬼の捉え方を「無力の論理」とであると斥ける。その一方で、それだけでは飽き足らず、偶然のもつ否定性が個体に現れるゆえに個体が自由になり、未来へと向かう契機になると捉え、否定のもつ否定性ゆえの個の自覚の契機に注目する。宮野氏は、偶然に「与えられたものを受け取るだけの無力」では、偶然を知ることにはならないと指摘し「偶然という意味が生成するには、他ならぬ人間の働きが必要である」と結論し、田辺に軍配を上げている¹³。

九鬼と田辺のそれぞれの偶然への考え方が彼ら師弟の哲学的思考の深まりと同時にどのように展開していったのかという道筋を追うと、九鬼、田辺の両者ともに偶然を現在性に起きる契機としてみなすものの、両者の間には、偶然に接した時の態度に相違がみられるというのが宮野論考のハイライトであるともいえるだろう。私なりに言い換えると、偶然との邂逅において九鬼が示した態度は受動的ともいえ

¹² Ibid. [2021]. 242.

¹³ Ibid. [2021]. 243.

る弱い積極性であったことに対し、田辺はあくまでも能動的にそれを積極的に引き受けなくてはならず、偶然との邂逅こそが自由の契機であるとまで断言する。なぜ二人の議論の間に相違が見られるのかについて、宮野氏は論考の注十六において、九鬼が偶然性の動性と無根拠性を重視したために、偶然を形成する自己、ひいては「被投性」と「身体」の議論が九鬼の哲学からは抜けていたからではないかと推察している。しかしながら、小浜善信氏によると、偶然について九鬼が考察したのは自己の生の問題として偶然を捉えていたことが論じられている¹⁴。また、九鬼は論考「時間の問題 ベルクソンとハイデッガー」においてハイデッガーの時間論については検討しているため、ここでは詳細を省くが、被投性についても承知の上だったと思われる¹⁵。身体についての指摘については、九鬼は直接的に身体について論じていないものの『偶然性の問題』において鍵盤楽器と弦楽器を比較し、弦楽器が鍵盤楽器にない魅力を持っているのには「偶然的可変性」があるからだろうと論じている¹⁶。つまり身体性と楽器との間に生じる偶然的可変については認識していることを察することができる。九鬼と田辺のハイデッガーの時間論の受容と解釈の相違および身体性への考察については、今後の研究に期待したい。

宮野論考では明らかにされていなかったが、別の観点から指摘するとすれば、宮野氏による丁寧な考察で垣間見えるものは、九鬼と田辺の議論の噛み合わせのズレは、両者における偶然の位相の捉え方の違いに起因するものであるとも云えるだろう。すなわち、九鬼は個としての私が当事者的主体性をもって現在性において偶然に邂逅した時に、偶然性をどう受け止め、偶然性が偶然にももたらしたものを、自分の中でどのように昇華すれば良いのかという問題設定としての偶然の捉え方で

¹⁴ Ibid. [2012]. 393-442.

¹⁵ 九鬼はベルクソンとハイデッガーの時間論の相異（九鬼の漢字遣いママ）について論じているが、両者の時間論の本質は意識の直接与件であるという認識という点においては同じ立場から立脚して時間論を展開していると論じている。九鬼の理解によると、両者の相異は、ベルクソンが時間の本質を「持続(durée)」として持続を経験する意識の複数性から時間多様説であることに対し、ハイデッガーは「世界時間」を立てることにより、現存在の「孤立」が強調されているにも関わらず、実存者が世界一内一存在として一つの世界時間に包摂されていることに注目している。九鬼周造著・小浜善信編『時間論 他二編』岩波書店、2016年、65-114。

¹⁶ Ibid. [2016]. 243.

あった。したがい、結論として実践の領域として偶然に邂逅した時に「遇うて空しく過ぐる勿れ」という教訓めいたことが導き出されている¹⁷。九鬼のそれに対し、田辺の偶然とは、九鬼の当事者的主体性という逼迫した受け止め方とは異なり、あくまでも第三者的に偶然を形而上論的に捉えた場合、それが自由の契機になり得ようという、必然（因果）の否定としての偶然という九鬼が『偶然性の問題』の序説で示した偶然性の定義を更に推し進めたものであるという読みも可能であろう。田辺が絶対と絶対を無にするための媒介の要請として「種」を立てざるを得なかった時、田辺が見た偶然とは、田辺の見た希望であったかもしれないとするのは拡大解釈であろうか。

4 偶然の考察——現代的視点からのいくつかの試論

改めて問う。偶然とはいったい何か。人間の主観を軸にすると、一般的には、因果律により物事は生成変化していると仮定されている。したがって、一見すると規則性が無いかのように見受けられる表象にも、背景には何らかの規則性が潜んでいるはずだということが仮定される。措定された仮定は、反証可能でありながら検証可能性（再現性）を通して理論へと精緻化されていく。また、こうした一連の知的営為が科学的態度であるとされている。科学とは仮定の否定から始まり、仮定をいかようにも否定し得ないとき、理論として認識される。近代に入り、人間の認識論を超克するような偶然性を内包する因果律につき、一見するとブラウン運動のようなランダム（不規則）に見えるような微粒子の動きに対してすら、アインシュタインの関係式（速度論）によって、ある種の法則性（粒子の拡散係数 D とその移動度 μ の関係性）が、ボルツマン定数（熱 T と体積 V ）を基底した時において見出されている。逆にいえば、ランダムであることが前提されているから故に成立するところに、現代科学は立脚しているともいえる¹⁸。

¹⁷ Ibid. [2016]. 282.

¹⁸ カール・ポパーは、ある事象に対して抽出される仮定そのものが人間の認識の反映とする。反証可能性を科学の大前提であるとし、科学は否定を通して進歩すると指摘する。例え反証可能な方法論を取っていたとしても、仮定が正しいことを前提に展開される科学的手続きを

古代ギリシア人たちは、ランダムに出る賽の目に偶然性を見出し、偶然性の背景にある規則性を探求した。そこから確率論が出てきたことは周知のとおりである。偶然性を外部化することで、一応の科学的説明を試みてきたのだ。これに対し、近代は本来、無作為であるが故に予測不可能であるランダムネス（無作為性）を科学に内在するものとして、一度は外部化して切り離そうとした偶然性を内部に取り込んでいるといっても過言ではない。例えば、一般的に市民に対して行う社会調査は、統計的分析をもって正規分布に従った確からしさに基づき、ランダム抽出された一部の市民の意見が民意であると推定する。ランダムのランダムネスを担保するためにサンプル抽出の際にはランダム係数の設定に配慮もされている。しかし、ランダム係数のように何らかの作為を偶然性に介在させているとすれば、それは本質的に偶然と云えるのであろうか。改めて現代において、偶然とは何かは問われなくてはならない。作為的に作られた偶然とは、偶然なのであろうか。

加えて、古代ギリシア人たちは、偶然性のある種の寓意（アレゴリー）として捉え、その背景にある規則性を希求したと同時に、主観的な時間や一瞬のチャンスを表すカイロス（καῖρός）の神話にみられるように、日常生活において回避できないものとして偶然性との邂逅も引き受けていた。人間の生に偶然性の観点から光を当てた時、宮野氏は「人間は、偶然に流されるだけの刹那的な存在」ではなく、「自分をもった存在として生きていかねばならない」としている¹⁹。ここで宮野氏が問題にしているのは人間の生における一個人の同一性であり「同一性との軌轢の中」で偶然性が生まれると論じている²⁰。私個人は、宮野氏とは異なり、個人（あるいは私）が同一性を持つというのは主観による錯誤か、同一でありたいと願う願望に基づく希望的観測の主観的、客観的結果に過ぎないと思う。生とは縷々転々としており、厳密には生物としての肉体は数秒前の私の肉体とは異なる。絶えず変化する肉体に宿る私の精神は、同一性を担保しようと足掻いているだけではないのだらう

踏んだ科学は疑似科学だと指摘している。現代科学が疑似科学ではないのだとすると、偶然性を取り込まないと近代科学は成立しようがない。カール・ポパー著・藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁—科学的知識の発展』法政大学出版局、2009年。

¹⁹ Ibid. [2021]. 229.

²⁰ Ibid. [2021]. 229.

か。また、個は常に偶然性に晒されており、希望のあるいは錯誤的同一性と偶然性が邂逅し、それらが偶然的に生を生きている主観によって偶然として認知された時に初めて、偶発的に別の方向へと現実が何かに開かれていく契機となるのだらうと思う。逆説的に云えば、そうした偶然性との邂逅を個が認知し、能動的、あるいは受動的に臨機応変さをもって偶然性と対峙することでしか、何かしらの因果律に変化が生じ、別の因果へと生が導かれる可能性は開かれていかないだらうとも思う。つまり、そこに生じているのは軋轢ではなく邂逅に過ぎず、何らかの道が予め措定されているからこそ、軋轢と感じるだけではないのだらうか²¹。

田辺が様々な論考で説く絶対性の概念に依拠すれば、個の同一性も一種の絶対と捉えることも可能であろう。しかし、その同一性をどの位相に求めるかにおいて、同一性とは儂く消えゆくものでもある。つまり、人間の生とはベルクソンの普遍的時間概念としての持続時間の中において、生まれてから死ぬまでの有限的時間の連続性の中において動的な繰り返しの中で日々が過ぎていく。生とは静的に平穩無事に安穩と流れていくものではない。では、動的なダイナミズムに満ちた生において、個の同一性の担保はどこに措定されるのだらうか。具体的な事例から紐解くと、調子が悪いな、という身体的自覚を抱きながら昨日まで日常を生きてきたのに、調子の悪い原因として今日、病院で不治の病であることを担当医に告げられるだけで、主観において生は同一性を失う。それに伴い、バタフライ効果のように、同一性を保っているという自尊心で保たれていた個は瓦解する。個が揺るぎない同一性を担保しているはずだと思えば思うほど、偶然との邂逅において、個の同一性は瓦解するのではないだらうか。だとすると、九鬼のように、偶然性の全てを引き受け、偶然との邂逅を称揚し、全て起こっていることは合目的性においては正しいはずだと仮定して、偶然性に流される刹那的な生き方も、生き方として一つの在りようだらう²²。

²¹ 私論は田辺と九鬼の折衷案でもあるが、因果の議論については、南方熊楠の拙論を参考にされたい。Sato, Maki. Minakata Kumagusu – Ethical Implications of the Great Naturalist's Thought for Addressing Problems Embedded in Modern Science. Edit. Lennerfors, and Murata. *Tetsugaku Companion to Japanese Ethics and Technology*. Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy; v. 1. Cham, Switzerland: Springer.

²² 宮野論考は、「人間は、偶然に流されるだけの刹那的な存在ではない。流れる時間のなかで、

人間の生という様々なパラメタ（生を受けた時代、場所、ジェンダー、教育、人間関係など）が複雑に相互連関している状態において、生について、偶然性の多層的交錯を念頭に入れた上でもなお、生における因果性に応じた必然とは何か、と問うこと自体にそもそも意味があるのかも不明である。社会のある種の切り取り方に基つき計測された数値を用いた統計処理結果に対し盲目的に信頼を寄せる態度は、因果律という魔術性に囚われた錯誤的態度であると指摘することも可能だ。つまり、ある傾向が顕著であったとしても、例外が無いわけではないはずだ²³。なぜなら偶然との邂逅の時点では、我々からは因果的偶然も偶然的因果も、そのどちらもが隠蔽されているはずだからだ。生における偶然とは、偶然との邂逅が主体によって認知されているかいないかに応じて、偶然との邂逅の真只中には、偶然との邂逅をしているという自覚そのものが立ち上がってこない可能性がある。換言すると、因果的に偶然と出会っているのか、あるいは偶然的に因果が生じているのかは、偶然との邂逅の最中には全く不明である。更に加えるとすると、仮に偶然性が偶然との邂逅の際に主体に認知されていたとしても、それは事後的に振り返った時に偶然と出会うこと自体が必然であったとして、現在的に認識されているに過ぎないのではないだろうかという問題も含む。偶然（偶発性や不確実性ともいうだろう）と必然（因果）の二極を仮定した場合、偶然との邂逅における時間性とは、その説明可能性については常に後付けである。つまり、偶然との邂逅は常に事後的に解釈されるからこそ、そこに合目的性など最初から措定できる術もなく、無限の偶然の積算である現在を、事後的に説明（解釈）しようとする企てそのものが、欺瞞の産物であるのかもしれないということが指摘できるはずだ。

田辺が問題にしたように、仮に偶然性に国家という絶対が関わってくるとき、問題はより複雑になる。国家が戦争を始める時、つい昨日までは隣人であった他者が、

自分をもった存在として生きていかねばならない」としている。この文章から宮野氏は、近代理性主義に則った理性的人間の一貫性を重視しているようにも読み取れる。Ibid. [2021]. 229.

²³ 例えば、低所得者は高所得者と比較して高等教育を受ける機会が疎外されているという統計的データがある。この場合、低所得者且つ高等教育修了者である人間の存在は、正規分布上では外れ値だと処理されるだろう。しかし、そうした例外が無いわけでは無い場合、例外を外れ値として処理するのではなく、個の個別具体性に配慮した社会秩序の在り方を模索していくことも、社会全体のセーフティネット構築のためには必要だと考えられる。

ある人々は偶然に敵になり、ある人々は偶然に味方に色分けされ、偶然に隣人であっただけにも関わらず、日常生活における外的他者から垂直的命令により色分けされた汝ら他者たちとの関係性の再定義によって個の行動は否応なく規制される。憎まなくてもよかった隣人を憎むようになるのも、偶然性の発露の一つなのであろうか。その際に、九鬼のように驚きをもって偶然と向き合う「無力の論理」よりも、田辺のように偶然との邂逅において、敵と見做された隣人を憎まないという自由を奪取してくる我性の必要性は、平時時には誰しもが共感することであろう。しかし、偶然との邂逅の現在性において、田辺が論じるような強い意志を発現できるほど我々は意志を強くもって生きているのだろうか。田辺の偶然との邂逅の現在性における、あるいは偶然性を媒介としたゆえの意志の発露とは、あくまでも理想論に過ぎないのではないだろうか。現実的には九鬼のように、偶然性のもつある種の暴力性を前にしたとき、その偶然の展開を受動的に傍観し驚嘆することで精一杯なのではないだろうか。他者の死との直面も偶然との邂逅の一形態であるとした場合、田辺をしても、夫人の死に直面した時の狼狽は激しいものがあったことは下村寅太郎の「追憶」にもみられる通りである²⁴。偶然とは、可能性にも不可能性にも開かれているゆえに、かくもあやふやであり、摩訶不思議なものである。では、偶然との邂逅に際し我性により自由を能動的に選びとっていく田辺の理想論から更に進めて身体性を伴う実践に移す場合、どのようにしたら、田辺が論じたように偶然を媒介としてもなお、九鬼の云うところの驚異という情動に打ちのめされることなく、我性により精神性の自由を確保することができるのであろうか。この問いこそ偶然との邂逅において、問われるべき問いであると思われる。

5 おわりに

宮野論考は「偶然が人間の生において果たす役割とは何か」という問いを開くことを終着点としている。宮野氏自身は、この問いに答えることなく、この問いは「哲

²⁴ Ibid. [2010]. 425.

学的に問い続けなくてはならない問題」だと言う指摘で論考を締めくくっている²⁵。宮野氏は偶然の意味付けにつき、九鬼のように互いのかげがえなさを開示する「美的」な偶然性の称揚であってはならず、偶然の意味付けには「この私」が生きる以上必要となる力が働いているだろうとしている²⁶。それは予測不能なある種の不測の事態である偶然に直面した時に、それでもなお「未来へ向かおうとする我性」の発現のためには必要な力でもあるのだろう。しかし、宮野氏が希求した田辺の鼓舞するような「力」がなく、九鬼のように「無力」であったとしても良いのではないだろうか。無力さゆえの強さも、渦動性の象徴の向上即降下、往相即還相の円環的渦動運動の中においては開かれていく可能性が内包されているはずだ。渦動の渦の中にあるからこそ、逆説が同時的に成立する可能性をも、動的な渦そのものの中に孕まれているものと思う。私はしたが、宮野論考との邂逅を通じ田辺、九鬼、宮野の死復活に立ち会ったという偶然性を通して、私の意志の自由を発露させるのであるとすれば、すぐに涙することでアウフヘーベンを図る小さき弱き者であることを選択してみようと思う。なぜなら、偶然が常に未来に開かれているものなのだとすれば、偶然との邂逅において、渦動の渦に巻き込まれている最中、偶発的に弱さの中に潜む己の強さに遭遇できる可能性もあるかもしれないと思うからだ。

参考文献

Lennerfors, Thomas Taro, and 村田潔. *Tetsugaku Companion to Japanese Ethics and Technology*. Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy ; v. 1. Cham, Switzerland: Springer.

カール・ポパー著・藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁——科学的知識の発展』法政大学出版局、2009年。

九鬼周造『偶然性の問題』岩波書店、2012年。

²⁵ Ibid. [2021]. 243.

²⁶ Ibid. [2021]. 243.

九鬼周造著・小浜善信編『時間論 他二編』岩波書店、2016年。

末木文美士『「碧巖録」を読む』岩波書店、2018年。

杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑編『渦動する象徴——田辺哲学のダイナミズム』晃洋書房、2021年。

田辺元著・藤田正勝編『種の論理』岩波書店、2010年。

田辺元著・藤田正勝編『死の哲学』岩波書店、2010年。

(さとう まき

東京大学 特任准教授・The New Institute Fellow)